



大賞

夜光虫

ラ・サール中学校 二年

三品 怜温

「今年の夏休み、無人島合宿に参加してみる？」母の口から突然飛び出した「無人島」と言う想定外な言葉に、ぼんやりとテレビを見ながら牛乳を飲んでいた僕は手の中のカップを思わずテーブルにドンと置いた。「はっ？何それ？いつあると？無人島ってどこ？」僕は母を質問攻めにした。僕のリアクションが予想通りだったのか、母は「で？行く？やめとく？」と冷静に僕の話に適当に区切り、食器を洗う手を止めることなく尋ねた。もちろん僕は二つ返事で合宿への参加を伝えた。僕は海や自然が大好きだ。家族で海へドライブや旅行に

行くと、何時間でも磯に貼り付いて生き物を捕まえたり観察したりする僕に家族は「いそおとこ」というあだ名を付けていた程だ。降って湧いた様なこのチャンスをみすみす逃すわけがない。母の話によると、インストラクター3人を含めた総勢10名ほどで鹿児島島の沖秋目島という無人島に渡り、電気ガス水道なしで（無人島だから当たり前なのだが）サバイバル生活をするというものだ。遠方から飛行機で参加する人のための前泊を含めた3泊4日の合宿らしい。僕は早速インターネットでその合宿についての情報を調べたり、主催者にメールで色々質問したりした。ぼくの集めた情報には、胸がキュンキュンするような心ときめく単語がこれでもかと言うほどちりばめられていた。「寝袋」「テント」「火起こし」「鶏の解体」「竹ヤス」「釣り」「シュノーケリング」「サバイバルナイフ」。

参加を決めた僕は、数日かけてネットショップや商店街にあるアウトドア専門店、家から自転車ダッシュで15分位行った所にあるホームセンターなどを回り、合宿に

必要な道具を一人で揃えた。親から一方的に言い渡された予算と、僕の希望との折り合いを付けるのに苦労した。そうやって揃えた道具を眺めているだけでぼくは、太陽や海の匂い、キラキラ光る海面や、火の粉を舞い上げながら燃えるキャンプファイヤーのパチパチという音を想像しニヤニヤした。

数日後、気持ち良く晴れ渡った8月の朝。首を長くして待った合宿当日がようやくやってきた。準備万端のもりだった僕だが、いざ当日になると何かと準備の不備が見つかりドタバタした。母親にブツブツ言われながらも母の手を借り、なんとか今度こそ準備万端、いよいよ出発だ。ぼくは新品のナイキの青いリュックを背負い、これまた新品のテントと寝袋を脇に抱え、行きつけの釣り具屋で480円で手に入れた、大きなフォークの様な4つ又の「竹ヤス」を手を持ち「楽しい時が一番怪我しやすいんだからね。」という母の毎度の決めゼリフを背に、僕は家を出た。朝僕を起こす時から出発まで、まるでうるさいテレビ番組の様にとめどなく流れ続ける母が

出す音からようやく解き放たれた解放感と、これから始まる冒険旅行への期待で、僕の足は勝手に走りだしていた。

集合場所まではバスで向かった。大荷物でバスに乗り込んできた僕をほとんどの乗客が変な人でも見るかのように、ちらちらとこちらへ視線を投げた。それでも僕は「実はこれから無人島なんです。」などと言ってまわりた様な、なんだか得意げな気持ちだった。僕は座席の背もたれの取っ手につかまりながら、出発したバスの揺れに耐えつつ目的の座席までよろよろと歩き席に着いた。集合場所までの約1時間、ぼくはバスの一番後ろの窓際の席を陣取ることにした。ここだと僕の抱えている沢山の荷物が、バスの背面のガラスの前にあるスペースに置いて便利だからだ。席に腰かけようやく僕は大きく息をした。バスの中で読もうと持ってきた本のページを開いたが集中できず、すぐに閉じた。昨日なかなか寝付かなかったせいか、朝からだたばたしたせいか、なんだか急に疲れを感じて目を閉じてみた。目を閉じてみると、脳

みそが眠るのを拒絶しているのが分かった。しかし、僕はしばらくそのままだにしていた。結局諦めて、目を開けると水筒の水を少し飲み、母が、朝ごはんを食べる時間が無かった僕のために持たせてくれたサンドイッチを少しかじった。そして窓の外をぼんやり眺めた。いつもはデジカメで撮った写真のように嘘っぽく見える、じりじりと照りつける太陽の光も青々とした街路樹の緑も、今日はみずみずしく3Dのように僕の目に飛び込んでくる。なんとか時間をやり過ごしていると、海の匂いがしてきた。集合場所の「がんじん荘」までもうすぐだ。

バスから降り立った僕は、青空を見上げ大きく伸びをした。蟬達が大声で泣きわめくのも仕方ないなと思える程暑く、じっとしているだけでも汗が噴き出た。両手いっぱい荷物を抱えていた僕は、それを拭く事もできず、流れるままにしていた。バス停から「がんじん荘」までは目と鼻の先程の距離だった。ちなみにここは鑑真の上陸地といわれている。「がんじん荘」というネーミングもそこからきたのだろう。その「がんじん荘」の目

の前まで来ると僕は、手に握りしめられ汗でフニャフニャになった地図のコピーを、ズボンのポケットにねじ込み、恐る恐る建物の中へ入った。どうも僕が一番乗りだったようで、そこには誰も居なかった。

「君、合宿参加者かな。名前はあ？」男の人の声に僕は振り返った。そこには、真っ黒に日焼けしたジャクシャの髪の毛をした、ジャングルでサバイバル生活していますという雰囲気の良い男の人が、ガハッと笑う感じの開放感満点の笑顔で立っていた。その人が合宿の主催者の一人であるテンダーさんであることが、ネットで写真を見ていた僕はすぐに分かった。「えっ…と…、あの、合宿に参加する三品です。よろしくお願いします。」と僕はあわてて挨拶をした。するとテンダーさんは、ブログの写真そのままの大きな目をキラキラさせて「おー。こちらこそよろしくねえー。」と、とても柔らかな調子で返した。テンダーさんは、普段から自宅に電気が水道を引かず生活しているつわものだ。ブログにあった、「車にひかれ死んでいたアライグマを拾って帰

り解体して食べた」というエピソードも、まんざら嘘ではなさそうだな、と思った。

それから僕は近くにある、その日宿泊する予定の漁業組合の建物へ移動した。テングーさんに促されるまま建物の中へ入り、部屋を見渡した。そこは日焼けした畳が敷き詰められた広い座敷で、部屋の隅には紺色や紫色の薄い座布団がうずだかく積み重ねられていた。部屋の中には海の匂いと少しカビの匂いがし、カーテンが風に揺れていた。そして既に到着していた参加者も数人おり、座布団を何枚か広げ、横になったりテレビを見たりしていたが、僕を見ると笑顔で軽く会釈をした。「とりあえず適当に座っててえー。」とだけ言い残し、テングーさんはどこかへ行ってしまった。僕は言われた通り適当な場所をみつくり、僕の体にまわりついていいる沢山の荷物を全部下ろし、やっと一息ついた。それからしばらくすると続々と今回の合宿参加者が集まり始め、はじめはテレビの音だけだった部屋には沢山の声があふれた。

合宿のインストラクターは、テングーさんの他にスバルさん、ネジさんだ。スバルさんは14歳の時に太平洋をヨットで横断し、最年少記録を打ち立てたサバイバルのプロだ。それからネジさん。ネジさんはとても熱い人で「ネジの様に、人と人を繋ぎたい」とそういうニックネームを自分で付けたらしい。そして参加者は僕の他に、鹿児島大学の通うネイさん、千葉からお母さんと2人で参加の高校生のタイガ君。（年の近いタイガ君がいてくれたお陰で僕は、この合宿をとっても楽しいものにする事ができた）それから、埼玉から来た5年生のコウタ君と6年生のコウタ君兄弟、そして神奈川から来たヒロキさんの十人だ。あと、テングーさん達の仲間のブンさんもキャンプ2日目から途中参加した。この総勢11名が今回の無人島サバイバルキャンプの仲間だ。

翌朝早く、朝ごはん用のおにぎりを一人3個ずつみんなで握った。僕はひとが素手で握ったおにぎりを食べるのが苦手だ。だから自分が握ったおにぎりを見分けられるように、目印を付けておいた。しかし結局3個握った

うちの2個は他の人に食べられてしまい、1つしか食べる事が出来なかった。他の人が握ったおにぎりを食べる事ができない僕はみんなが心配して勧めてくれるおにぎりを、食欲がないふりをして断った。だが僕は、その数時間後にはその事をものすごく後悔する事となる。

朝食後、僕はボートで沖秋目島に向かった。沖秋目島は薩摩半島西部から約10kmの所にあり、切立った崖がいくつも周囲を取り囲んでいた。僕にとって初めての無人島だったその島は、白い砂浜のビーチのあるリゾート地という感じではなく、ごつごつした岩や雑木林が砂浜のすぐそばまで迫る自然むき出しの、僕が今まで恋い焦がれた「完全な自然」そのものだった。ぼくは、ドラマ「LOST」や小説「蠅の王」の物語の中に飛び込んだ様な異常な興奮をおぼえた。透明な水色の海から、波打ち際で大きく弾ける波と一緒に砂浜へ足を伸ばし無事上陸を果たした。太陽がガラガラ照り付けとても暑かったが、吹き付ける澄み渡った風が心地良かった。小川に沿って雑木林を抜けると、2m位の幅の川があった。そ

の近くには僕の太もも位の深さがありそうな沼地もありちょっと気味が悪かった。

島に到着してまずやった事は、ロープワークを教えてもらい共用のテントなどをみんなで協力して張って基地を作る事だった。その後、水に慣れる練習と遊びを兼ねて数時間シュノーケリングをした。待ちに待った海での水遊びのGOサインに僕は「うおー」と叫びながらありったけの力で飛ぶように海まで走った。走りたかったというよりも、走らざるを得なかった、と言った方が正確かもしれない。というのも砂がものすごく熱く、まるで熱した鉄板の上を走っているようだったからだ。他のみんなも一斉に広い海に散り散りバラバラになった。あまりの暑さにもう少して火が噴き出しそうだった僕の体を、なま温かい海の水が冷やしてくれた。こんなに気持ち良くて楽しい事は他には無いと思った。夢中で泳いだりマスク越しに水中をのぞいたりした。僕のおののすぐ下の海面からでも海中はスケスケで、泳いでいる魚やサング礁が丸見えだった。魚の方も「見たいなら見ろよ。

お前人間って言うんだろ。俺達知ってるぜ。」といった風な様子で悠々と泳いでいた。海の中は、差し込む白っぽい太陽の光の筋や、青と黒のしましまの小さな魚の群れや透明なスズメダイ、クマノミやタツノオトシゴなど様々な色や生き物で溢れていた。もし本当に天国があるのならこういう感じなのかなと思った。

しかしぼくは本格的な素潜りは初体験だったので「耳抜き」が上手に出来ず、楽しいと言うよりむしろ必死だった。耳抜きとは約1m潜ることに空気を鼻に送り込む事だが、鼻をつまみティッシュで鼻をかむ要領でやるとうまくいく。耳の中でポンという音がして耳の痛みがすっきり無くなる。これは慣れるとなかなか気持ちがよく、それが出来るようになる僕は無駄に何度も鼻をつまみ耳抜きをした。透明なガラスの様な水面に顔を付け中に潜ると、今まで僕を取り巻いていた音の世界から解放され、僕のすぐそばで泳ぎ回る生き物たちに夢中になった。

さらに息が続かない事も僕の楽しい素潜りを阻んだ。

ぼくはものの数秒で苦しくなり、慌てて水面へ上がらなければいけなかった。そしてまたすぐに中をのぞきたくなってもう一度潜る。今度は海水がマスクに入り慌てて水面へ顔を出す。こんなことを1時間以上も忙しく繰り返した。何度かスバルさんが「レオン大丈夫かー？」と様子を見に来てくれた。夕食の時には何人かの人に「溺れているのか水遊びしているのか良く分からなかった時が何度もあったってちょっと心配したよ」と言われた。よほど不格好だったのだろうとその時ぼくはとても気恥ずかしかったが、なんとかそれを笑顔でごまかした。そんな僕を横目に、年長者はみな上手に潜り本当に楽しそうだった。大人が真剣に遊んでいるのをあまり見た事が無かったので「海遊びは大人も楽しいんだな」と思った。そしてさすがの僕も、海遊びが終わる頃には素潜りのコツを掴んだ。

この日は何時間も海の中でもがいたあげく、朝食から夕食まで食事無しだったので（正確にはバナナ1本）あり得ない程の空腹に襲われた。ぼくは朝食のおにぎりを

1つしか食べなかった事を本当に後悔した。

海からあがると、みんなで散策を兼ねて焚火のための薪拾いをした。薪は砂浜や雑木林に沢山落ちていた。野鳥の鳴き声が響きわたる雑木林の中には、いかにも僕の大好きな昆虫が沢山いそうだった。僕は虫採りをしたかったけどなんとか我慢して薪集めを手伝った。

日が沈みかける頃には、各自テント張りも夕食の準備も終了した。この日の夕食は、スバルさんが素潜りしてヤスで仕留めた50cm級のヒドリマキやカワハギやタイの仲間やオウモンハタだった。全部で8匹いて、それをみんなで刺身や塩焼きやスープなどにして食べた。僕も大人たちに教えてもらいながら、魚の鱗取りや三枚おろしなどを手伝った。米を炊いておにぎりにしたが、誰が握ったものかなんてもう全く気にならなくなっていた。スープや水の回し飲みも平気になっていた。

夕食を食べ終わる頃にはもう真っ暗だった。無人島なので周囲に明かりは全くない。真黒な深い闇が僕達を取り巻いていた。こことは別のなにか得体の知れない世界

と、今僕達がいるこの世界の境界線が、あの吸い込まれそうな暗闇の中であいまいになっている様な気がして、あまりじっくり見ないようにした。一方大人たちは、僕達にとって唯一の明かりである焚火を囲み、お酒を飲んで楽しそうにおしゃべりしたり大笑いして盛り上がっている。それを見ながらぼくは「大人になると暗闇が怖くなくなるのかな」とか「早く僕も大人になってお酒を飲んでみたいな」と思った。ぼんやり焚火の赤い炎を見ていると、とてもリラックスできた。間もなく僕は強烈な睡魔に襲われた。楽しそうな声や音に後ろ髪を引かれながら、懐中電灯を手にも「おやすみなさい」の挨拶をして自分のテントに潜り込んだ。

次の朝、ぼくは波の音と海の匂いで目が覚めた。脱皮中の蟬のように寝袋からもぞもぞと這い出すと、テントから顔を出して外を見た。素晴らしくいい天気だった。そして、すでに海に入っているスバルさん達の姿を見た僕は、たまらずテントを飛び出し、砂に足を取られてよろけながらも、裸足でまっすぐ海まで全速力で走った。

海の水はとても冷たく、寝起きの僕の体と頭を刺激した。でもすぐに水の冷たさも忘れ、沢山の色の生き物達に夢中になった。素潜りも随分上達していた僕に、スバルさんが「朝食の魚を、竹ヤスで仕留めておいで」と声をかけた。素潜りして魚をとる事は、合宿に参加する上でものすごく楽しみにしていた事の一つだったのでうれしくて、急いで竹ヤスを取りにテントへ走った。

ぼくは父親の影響もあり、釣りが大好きだ。針に獲物がかかり、ブルブルという手応えが竿を通じて手に伝わってきた時の感触は本当にたまらない。「竹ヤスで魚を仕留める時の感触もあんな感じだろうか。」と胸が高鳴った。

ヤスを使って魚を仕留める方法はどうだ。まず顔だけ水に付けてフワフワ浮き、魚がいかにもういそうな「くぼみ」のある岩を見つける。それから潜って魚がいるかを確認したら、魚との戦いの前に一度息つぎのために水面に上がる。思いっきり空気を吸ったら再び潜り、ヤスに付いたゴムを先端についたフック部分の付け根まで

思いっきり引き延ばす。そしてしっかりとその部分を指で押さえておく。魚からヤスの先までの距離を30〜40cmまで近づけたら、一気に手を離す。ヤスの長さは1m位なので、魚に命中すればその手ごたえがしっかりと手に伝わってくる。ヤスの先端が外れて岩に当たると最悪だ。

グワーンという振動で肘の所までブルブル、ゾワゾワするのだ。ヤスで獲物をしとめた時の手ごたえは、釣りの比ではない衝撃だった。その衝撃に僕は、血が湧きたった。さらに素潜りでは釣りとは違い、魚の感情が目ではっきりとかがえる。その事はぼくをとっても緊張させた。ヤスが刺さると、びっくりした魚はそれから逃れようと必死であばれた。ぼくをとっても驚かせたのは、魚が「ただじたばたと暴れている」のではなく「力を集中させるように周期的に動きを繰り返していた」事だ。頭を使って自分の命の危機を必死で乗り切ろうとしていると感じた。格闘の末、ぼくは2匹の魚を取る事ができた。40cm級の赤色をしたブダイの仲間と、20cm級のボラだ。初めての素潜り漁にはなかなかの出来に満足した。

この日の食事も一日を通してどれも絶品だった。でもこの日は、直接対峙した魚の「しまったー」という表情や恐怖の表情を思うと、ただおいしいというだけでなく申し訳ない気持ちになった。もともと魚を食べるのは上手な方だが、最後までもつとしっかり食べなくてはいけないと思った。

昼食兼用の朝食の準備の時には「火起こし」を教えてもらった。2人1組で行うのだが、2枚の板の間にひもを絡ませた棒を挟む。固定した板とひもを使って回転させた棒を摩擦させて出来る、もこもこした灰が火種だ。

これをヤシの木の皮の繊維でそっと包み、息を優しく吹きかけ燃え上がらせ、薪に入れる。追加のヤシの木の皮の繊維や細い薪で火を安定させれば出来上がりだ。思ったよりも上手にできた。これにはコツがあり、棒を回転させる時、ひもをチョコチョコ引くのではなく肘を思いっきり後ろへ突き出すようにして引く事。そして棒を挟んでいる上の板を強く押さえ過ぎないことだ。

この日も昼の間、海や雑木林で思いっきり遊んだ。そ

して早めの夕食を終えると、スバルさんとネジさんをリーダーとする「子供班」を結成し、暗くなる前にベースキャンプを離れ新天地へ向かった。合宿中に教えてもらった事を大人の手を借りずに子供達だけで実践するためだ。基地から海岸に沿って300mほど行ったところにテントを張り、新たな基地とした。張り終わる頃にはオレンジ色の夕日が、もう黒くなった海に吸い込まれていくところだった。

子供達だけで作った新しい基地には、同伴しているスバルさん達の考えで焚火を作らなかった。だから日が暮れてからは完全な黒の世界だった。ヘッドライトや懐中電灯だけが頼りだ。本当に何も見えない。どれ位見えないかというと、黒の深さや質感の違いで林か空かを判断しなくてはいけないという具合だ。この日の夜には、夜光虫を見るため夜の海に潜るのだが、その時感じた「どこまでが海でどこからが砂浜かの区別がつかないこと」が特に気持ち悪かった。よくが皮膚感覚だけでは砂と水の区別も出来ない位に、普段視覚に頼っている事に驚い

た。そして無人島の夜はまるで小さい頃に、分厚い布団にもぐって、中に持ち込んだおもちゃで遊んでいた時の様に、何もかも手探りなのだ。

スバルさんが子供2人ずつを連れ、3回に分け夜光虫を見に海へ連れて行ってくれた。夜の海は全ての光を吸い込んでしまったように黒く、遠くに米粒くらいの灯台の灯りが見えるだけだった。昼間とはあまりにも違う夜の海の姿にぼくはドキドキした。そんな僕の気持ちをよそに、スバルさんはさっさと海へ入っていった。スバルさんの動きに合わせて、青白い大量のつぶつぶが光の尾を引きながらきらめく。そしてその光の集まりはどんどん沖へ離れていく。「何も怖くなんかない。」と自分に言い聞かせ必死でそれを追いかけた。しかし昼間のようにうまく体が浮かない。足かせが付いているかのように、ブラックホールの様な真っ黒い海底へ吸い込まれそうだった。半分溺れながらよく見ると、僕の手や足からそっと光があふれだしていた。僕に絡みついていたひんやりと冷たい水は、いつの間にか夜光虫の青白い光に置

きかわっていた。水中はシーンと静まり返り、何の音もしない。ただあるのは、沢山の青白い小さな光だった。急に魔法が使えるようになったかのような不思議な気分だった。動きを止めると自分の手の平も見えない程の深い闇に戻ってしまう。下りのエレベーターを逆走しているかのように必死に水中をもがきながらも、夢中で夜の海をゆらゆらとかき回した。暗闇や溺れる事への恐怖が戻ってきたり、夜光虫の光に夢中になったり、僕の心は激しく揺れ動いた。まるで自分が宇宙に居る様な、星空を飛んでいるような気分だった。スバルさんとタイガ君の光も遠くで輝いていた。

海から上がり、子供班の基地へ戻った僕とタイガ君は砂浜に寝転がり、夜光虫の余韻に浸りながら星空を眺めた。夜の海の恐怖に比べれば、砂浜の暗闇はもうなんともなかった。月のいない真っ黒な夜空には、今まで見た事がない程明るく沢山の星が、空いっぱい撒き散らされていた。ものすごく精巧な星座早見盤を空に貼り付けた様な星空は、今まで感じた事のない深さと奥行きを

感じさせた。僕の体は自分では全く見る事ができない程真っ黒で、すっかり暗闇の一部になっていた。自分自身の体が確かに存在している事に確信が持てず、自分が魂だけになった様な不思議な感覚になった。ただ波の音と沢山の星くずの光だけが確かなものに感じられた。星空を見ていると、突然星が流れた。初めてみる流れ星だった。すると次から次に、流れ星が弾け落ちた。僕は圧倒され、ただ受動的に目を開けてそれを無防備に眺めていた。おそらく目だけでなく口も開いていたに違いない。線香花火のような蜘蛛の糸よりも細い閃光がいくつも降り注ぐ。合宿2日目のこの日の夜は、みんなそのまま砂浜で眠った。

最終日である次の日の朝早く、隣で寝ていたタイガ君が僕を起こしてくれた。前の夜流れ星を見ながら「明日、日の出と一緒にみよう」と話していたからだ。僕達は起き上がると、透明の薄紫色の空が、今まさに青空に変わろうとしているのを目撃した。海は、キラキラした水色の優しい姿に戻っていた。僕らはその素晴らしい景

色をうまく言葉にできず、ただただ「すごい」「すごいね」と2人で夢中で連発していた。

合宿3日目。いよいよ最終日。この日の朝は「大人の手助けなし」というルールのもと、子供達だけで食材を調達する事となった。ぼくと、小6のユウタ君、それにタイガ君の3人で海に入った。かなり苦戦した僕達にとって、小さなボラ1匹と同じく小さなベラ1匹が子供班5人分の貴重な朝ごはんとなった。それだけではとても足りないの、岩にはりついている貝も採って石焼にして食べた。今考えると「ホームレス中学生イン無人島」という悲壮感漂う朝食だった。一方スバルさんとネジさんは、そんな僕達をよそに「今朝の食事は自分の食べる物は自分で採るルールだからね」と思われる事もなく、大きな魚をむしゃむしゃ食べていた。

子供班一同は朝食後片付けを終えると、初日に設営したベースキャンプに戻った。すると僕達と行動を共にしていたスバルさんとネジさん以外の大人たちが、十m程の高さの岩からダイブして楽しそうにはしゃいでいた。

もちろん僕も挑戦した。いざ岩の上に立ち、そこから下を見ると足がすくんだ。心を決め、体を丸めてギョツと目をつむり海へ飛び込んだ。ジェットコースターの頂上から放り出され落下しているような気分だった。地球の引力をものすごく感じた。一回目は鼻にめちゃくちゃ水が入るし、水面に叩きつけられた所は痛いしで散々だったけれどとても気持ち良かった。結局ぼくは3回ダイブした。

最後の食事となるこの日の昼食は、養鶏場から引退する2歳のにわとりを解体し、調理する事になっていた。風の中を草が揺れるけもの道をしばらく行くと、その道の先にちよつとした広場が広がっている。そこで僕達にはわたりの解体をした。最初に首にナイフで切れ目を入れる。すると血がドボドボ出てくる。しかし驚いた事に、にわとりはその状態で大暴れし飛んだのだ。それに僕を含めた子供達はみんな動揺して固まってしまった。解体を手伝おうにも手も足も出なくなり、おろおろしていた。スバルさんが見かねて「ほら、完全に動かなくな

るまでしっかり押さええとかんといかんよ」と言いながら、飛び立ちそうになっている鳥を押さえこみ僕に渡した。ぼくは言われた通り、鳥が完全に動かなくなるまで押さえていた。しばらくすると首がブランとなった。するとスバルさんは鳥の両足を持って逆さにし、熱々の湯の中に頭の方からつけた。引き上げるとすぐに羽をむしらなければいけなかった。肉が堅くなり、羽根をむしれなくなるからだ。羽根をむしったにわたりの肌はまさに鳥肌だった。1つ1つにイチゴの種くらいの大きさの穴が開いていた。解体する前のにわとりは独特の臭いを放ち、小学校時代にやった飼育係を思い出した。しかし茹でると、匂いが全く無くなった。命が無くなると、匂いも無くなるのが不思議だった。その後、理科の授業の様に内蔵の説明を受けた。肉を切り分けて作業が終了するまで約2時間かかった。生き物を食べるために解体することは、本当に大変な作業だった。

肉は鶏飯になった。鶏飯とは鹿児島県の郷土料理で、ご飯にほぐした鶏肉、錦糸卵などの具材と薬味をのせ、鶏

から取ったスープをかけて食べる料理である。ささみは刺身にした。ささみが店で売られている物よりもはるかに小さい事に驚いた。厚さは一番厚い部分でも5mm程度しかなく、長さも7cm弱しかない。驚いている僕にスバルさんが「店で売られているものは、太る餌を与えたり品種改良したりして無理矢理太らせたものだから大きいんだよ」と教えてくれた。ささみの刺身は人数分に切り分けてくれたが、一人分が大豆1粒くらいの大きさになってしまった。口に入れて慎重に3回ほど嚙んだときには消えてなくなっていたので味は分からなかった。

朝に誰かが採ったウツボも、かば焼きにして食べた。

骨が多いのが欠点だが、淡泊な白身魚で本当においしかった。食後には、この日がたまたま誕生日だったタイガ君のために用意されていたスイカを、ハッピーバースデーを歌ったりしながらみんなで食べた。こうやって島の全てが終了し、片付けを済ませた僕らは迎えの船に乗り込み本土へ向かった。

船が岸に近づくと、港に僕の両親の車が停まっている

のが見えてきた。向こうからも僕が見えたようで、戦隊物のキャラクターがプリントされた黄緑色のお気に入りTシャツと紺色のアディダスの半ズボンを着た6歳の弟が、駐車してある車の後部座席から飛び出し「にーにー」と何度も大声で叫び、走りながらこちらへ大きく手を振った。助手席の母と運転席の父も車を降り手を振っていた。合宿はたった3泊だったのに、家族に会うのが随分久しぶりに感じた。急に現実に戻った気がした。そして「竜宮城から戻った浦島太郎もこんな気持ちだったのかな」と思いながら、ちよつとはずかしかったが僕も大きく手を振った。